

秋田美人とそのルーツ

新野直吉 (にいの なおよし)

秋田大学名誉教授 (元秋田大学長)

秋田の女性は「秋田美人」と称され、広く知られている。その特色は、湯沢市 (秋田県雄勝地方の中心都市) に居住の杉本元祐医博が数千人の女子生徒の肌を調査した結果、「皮膚色調」の白色度が秋田県全般では29.62%で、日本人の平均22%を大きく上まわっていること、秋田県南地方では30.5%で、西欧白色人種の40.5%と比べても、中にはそれと変りない白い肌の人も少なくないことを明らかにしたのである。

秋田美人は色白であるということは、某化粧品会社の全国的調査でも明らかにされている。外見的にはその色白が瓜実顔の類型の面貌でおとなしそうであり、すんなりした長身の体型をしているということになる。そしてそれは内面的にも心情穏和で競争を好まない事実と、教育統計などで中学生の身長が東北・北陸の地方で高く、秋田が多くの年に首位である調査実態で確認することができる。

秋田に来訪来任する人が「美男子が多い」という感想を述べられるのもよく聞くところであるが、何処の「少女」も母親から生まれたのであるが、母親だけで生まれてきたのではない。クローン牛・羊でもその細胞の原由には父母がある。美人の生まれる風土に美男子も生まれることは生物学の鉄則であろう。

ここで「少女」と特に書いたのは、秋田美人というのは生来の素質美人で、後天的化粧美人ではないからである。化粧や近時聞く海外伝来的整形による「大人美人」なら職業的要請や人為的事情で遙かに秋田女性を凌ぐ個的存在を観ることはできるであろう。先天的総体の問題として「秋田美人」は論ぜられるべきである。

奇しくも「秋田さきぎけ」2003年元旦刊は「これがイマ風」とCG作成の《秋田美人》を丸顔・直線眉・パッチリ二重眼・小鼻・厚小口であると報じた。瓜実顔も、切れ長の眼も、通った鼻筋も、昔語りである。丸顔は奥羽山脈を越えた彼方の特徴で、田沢湖辰子姫像が建った時、(ホー南部系美人だネェ)と呟いた私見も過去のものになった。記者氏に感想を求められての返答は「活発そう。活躍する現代女性のイメージ。一口に『秋田美人』といっても、時代や社会状況によって変化するのだろう」であった。

そういえば旧著で、某化粧品会社の成人女性の前腕伸側と上腕屈側の皮膚色を、1979年光電測色器で測定した結果に基き、年間日照時間などとも関連する秋田女性の白色度の高さを認め、「色の白さは七難隠す」の俚語は「真理なのである」と書いたが、1987年の日本音響学会の『特別講演』では「海外にまで肌を焼きに行く現

代の若い女性の美的感覚では……俚語は通用しないかもしれないが」と述べた (同学会誌43巻2号) ことも想起されるところである。

秋田美人のルーツということになれば、説は幾つもあり得る。その中でも特徴的なキーワードとして、「小野小町」と「白系露人」が思い当たる。

「小野小町」については、良く知られる民謡に

秋田のおなご (女性)

なんして (どうして) きれ (綺麗) だと

聞くだけやぼだんす (野暮ですよ)

小野小町の生まれ在所

おめはん (お前さん) 知らねのげ (知らないのかい)

というのがあって、世間の常識をよく示している。

「白系露人」については杉本元祐博士が上述の通り多数の女学生などを調べ、秋田女性の肌の白さについて〈白系露人との混血ではないかと考えた〉というものである。

前者は秋田美人の容貌をいうわけであり、その根底に美人には伝統性があるとする判断があることを示している。後者は人種的な血液の問題と受け止めたことを示している。

どちらも一般的には受け入れ易く、妥当の説の如くでもあるが、歴史学の立場からいえば承認し難い。とはいってもそれは「小野小町が美人でない」ということでも、「露人すなわちロシア人が色白でない」ということでも勿論ない。

結論的な表現を先に示せば「小野小町が秋田出身でしかも美人であった」ということは学問的に証明し承認することができないということと、「白系露人が秋田に入来して女性を色白に変えた」ような史実は存在しないということなのである。

少しく説明を加えると、

をのこまちは、いにしへの、そとほり
ひめの流なり。あはれなるやうにて、つよ
からず。いはば、よきをうなのなやめると
ころあるにいたり。つよからぬは、をうな
のうたなればなるべし。

というのは、小野その人の容姿の美醜を論じているものなどではなく、小町の歌が、やはり女流名歌人である昔の衣通姫の歌に通じている。「強からず」という情趣は「女の歌なればなるべし」という結論で、それは、歌人紀貫之が小町の歌のことを初め『続万葉集』とも称された『古今和歌集』の「仮名序」で論じているものなのだ

ということ、全く疑う余地なく示しているものである。

貫之は歌を論じただけに、何故美女説が生まれたかも一応考えてみる必要はある。恐らく一つは、美身が着衣を通して見えたことと伝えられる伝説の美女衣通姫とならべて評価されたことであり、二つは、『古今和歌集』の《恋》の部で在五中将在原業平の歌と小町の歌が並び称されて来たことであろう。いうまでもなく業平は歴史を通じて美男子の代表とされて来た人物である。

平安時代を代表する『伊勢物語』という小説の主人公と混同されて伝わる業平は、恋多き男性と意識されており、物語上色好みの主人公の相手は超美女と意識された筈だ。「物語」とは今の言葉でいえば「小説」である。『源氏物語』は物語（小説）の代表であるから、『伊勢物語』のフィクションの在り方も理解されると思う。美男業平の対の女流歌人小町は美女でなければならない。平安時代中期に『伊勢物語』が作られた時は、小町は遙か昔の、いわば時代小説の主人公たり得べき女性だったのである。フィクションは自在に加えられたことであろう。ましてや中世になって能で扱われ、謡曲に描き出される小町物になれば、史実などは小町なる女性が小野氏の出であったことぐらいしか問題にならなかった筈である。

秋田にかかわることとしては、出羽郡司小野良実の娘だという伝えになっている。そうすると出羽郡とは山形県の庄内にあるから制度的には合わないことになる。秋田で小野小町の出生地の伝承を持つところは雄勝郡である。伝説が出羽郡と誤っているが実は雄勝郡だったと修正して筋を合わせてみても、歴史学上は矛盾がある。「郡司」とは本来在地の豪族が世襲的に任命される役職で、京師から下向赴任する官職ではないからである。ということになれば父の帰京によって京に戻り9世紀前半に宮仕えをする可能性も生じ難いことになる。

しかし小町が仁明天皇（833～850年在位）の世、宮廷に勤めていたことは史実とされ、六歌仙（僧正遍昭・業平・文室康秀・喜撰法師・大友黒主と小町）唯一の女流歌人で、遍昭・業平・康秀・安倍清行などと歌の贈答をしたことも作品上確実である。やはり本来京洛の地にすむ小野氏の子孫だったのであろう。

小野小町が住んでいたという（『山州名跡志』）地名説話のある京都市山科区小野だけではなく、京都市では左京区と北区にも小野はあり、それだけではなく古代史料でも山城国葛野郡・宇治郡・愛宕郡に小野郷が散在しており、大族小野氏の京都近傍における勢力分布の大きさがわかる。

当然雄勝郡の小野にも小野氏の関係が及んでいたとして不思議ではない。小町の歌に東北陸奥の地名があっても、陸奥が歌枕となっている地名を多く持っていることを思えば、これも不自然ではない。現代の流行歌謡の作詞家が「北」を好むのと古代歌人の詠む地名に「北」が好まれたのは、通ずる詩情があつてのことかもしれない。

東北でも秋田の小野の他に山形県小野川、福島県小野、宮城県小野など数多伝承の地がある。もちろん南西日本

にも小野氏の影響は及び、例えば山口県にも小野地名は多く、殊に昭和14年以後は下関市内であるが、本来長門国豊浦郡である小野には小町の墓塚がある。どうも秋田だけで小野小町を独占することの正当化はし難い。

なのに、雄勝の小町伝説のことは江戸時代には定着していた。天明5年（1785）4月14日小町伝説の地小野を訪ね、いわゆる遊覧記に記録（『小野のふるさと』）した白井英二（後の菅江真澄）は肯定的姿勢で対しており、天明8年（1788）幕府巡見使に従って記録した古川古松軒は、小町芍薬塚の存在のことは案内で聞いたのであるが、巡見の場所でないとして特に興味を示さなかった（『東遊雑記』）。今風に表現すれば、歌も詠み旅の文人である英二は文学的で、地理学者といってもよい古松軒は社会科学的であるという立場の差はあると認められるが、伝説定着状況は明らかに知ることができる。近代になって民謡の作者が抵抗なくその歌詞を詠み出したことも理解できる。

白系露人の混血の方は、杉本博士が書かれた文章の中にそういうフレーズがある件を知った時から、当然ながら「そんなことはない」と即座に考えた。その段階で、白系露人問題の生じた1917年は70年にも満たない近過去である。「十月革命」の際ソビエト政権に背を向けて国外脱出したロシア人は、満州などからも樺太などからもきっと日本を通過した数が少なくはなかったであろう。日本に定住した人もいたに違いない。秋田に関わった人もいたことであろう。しかしそれは血液を混ざるような状況に結びつくにしても極めて制約のあることで、大勢として秋田の女性を白い肌にする程の結果を導き出すなどということは、あり得ない話である。

第一「〇〇さんのお祖父ちゃんはロシア出身」とか「△△さんのお祖母ちゃんはロシアから」というような話を聞くことは絶えてないのである。ただこのことは、従来秋田の女性が美しいとすればそれは風土性が重大要因であろうと考えていた自分に、「若し混血的なことがあったとすれば、白系露人のような一過性のことではなく、長い時間経過のスパンを考えなければならない」という、一つの想定の判断を導く刺激になった。

昭和59年（1984）冬、白水社から秋田美人についての執筆を求められた。「高句麗好太王碑」の戦後初探訪から帰った7月に出した『秋田美人の謎』にこの論を書き、さらにその書中に人文科学の面では『シンポジウム古代日本海文化』（小学館）に所収の「日本海文化をめぐる問題提起」という討論で、大林太良教授が「いろいろな港において重要な役割を果たしていた人たちは、必ずしも土着の人と考える必要はない。よそから来た人が重要な職についていたことも十分考えられる」といって、日本海の周りの古代から現代までのいろいろな伝承を見ると、「大きな特徴として、海を越えての男と女の関係がどうも目につく……海を越えての男と女の往来が日本海地域に非常に広く分布している」と述べ、「人間の移動も盛んに行われていたことをある程度反映しているのではないのでしょうか」と結論づけているのを引用

特別講演会

した。

自然科学の面では、昭和59年1月5日付『読売新聞』の記事の、大阪医科大学松本秀雄教授（法医学）が、25集団5200人の血清をソ連科学アカデミーの協力で調査し、その研究に基づいて「抗体遺伝子分布図」を作り、日本人のルーツはバイカル湖北方に住んでいたプリアートであることを裏づけて、この年7月、ミュンヘンで開催される国際輸血学会で報告することになったという報道を引用したのである。

要するに歴史学の史料に基づいた自分の判断が突飛で独断的な説ではないということを示そうと考えての構文だったのであろう。ところでこの考え方が単なる仮説ではやはりなかったのである。

松本説では、日本人が北方型蒙古人種の特徴的遺伝子を持つということなのであるが、同じ医学分野で極めて直接的な研究成果が明らかになって来たのである。すなわち平成13年（2001）早春の頃に《○○リサーチ》なる番組に出演を求められたのである。それは上に述べた『秋田美人の謎』が、このチームの作品主題に先行的に結びつく著作であるという判断を持ったことによるのであった。

番組は、東京大学医科学研究所余郷助教授らのグループが、東北の秋田地方の人々にヨーロッパ系の民族が伝えたウィルスが存在するという研究結果を明らかにしたことを前提にして、企画されたものであった。秋田県立博物館に取材に来たチームリーダーは岡崎の出身であるとのことで、世界でこの博物館にしかない『菅江真澄資料センター』でビデオ採りをする際、豊橋で生まれ岡崎で育ったと伝えられる菅江真澄の展示に、然るべき関心を示していた。

またこの年の10月14日付『秋田魁新報』では、健康に関するコラムで、秋田県西木村立西明寺診療所の市川晋一所長が、尿潜血のことを「秋田県人の約10%に白人特有の垂系 EU 型が認められた。有史以前に白人の血を引くあるヒト集団が日本列島に渡来したと考えられている」と述べたのである。同記事はさらに「東京大学泌尿器科の北村唯一教授は、健康人の尿中に病原性はないが、ヒト・ポリオーマウィルスの一種である JCV が

頻繁に検出され、ヒト集団とともに移動し、おのおののヒト集団に特異的な垂系が存在し、人種と関連があることが明らかにされ」、それに基づく調査に市川所長は協力し秋田で調べたのであることを説明していた。

いわゆるヒトの個体についての生きた資料によって証明される形の医学の説は、極めて直接的な説得力を持っている。

一方、秋田には平成14年（2002）に入部400年を数える近世秋田の領主佐竹氏に結びつけられた「秋田美人成立説」もある。水戸城から秋田に移封される際に、彼の地の美女を多数又は皆秋田に連れてきたのだという説である。そういうことになれば美人を連れ出された地は、美人の空虚地帯となることになるはずである。一般受けはする話かもしれないが、佐竹領6郡の住民と、戦国時代の後に未知の出羽に、絞って伴った家臣団の人数との対比からいって、秋田の女性を支配的に美人にすることには数量的見地からしても否定的にならざるを得まい。

佐竹氏が名将であればあるほど、人材本位の家臣団編成をこそ考えはすれ、美女集めなどという酔狂は考えないであろう。華やぐ元禄社会まではまだ1世紀ほどの開きがある時代のことである。実は秋田には、「秋田の魚」といわれるほど不思議に好まれるハタハタが存在する。19世紀初めの頃に当てられる『雪の道奥雪の出羽路』という日記紀行に附して、著者の菅江真澄はハタハタが佐竹侯に随って常陸の海から秋田の海に移動したといわれていることを註記している。佐竹氏と秋田美人の話もこれと同工異曲のように思われる。

また人類学者の書いたもので、「北前船」が秋田湊で風待ちをしていて、京都の船頭の逗留することが多く、京美人と同じ血が秋田美人を生んだのだという趣旨の文章を読んだことがある。しかし浪速や兵庫出身の船頭はいたであろうが、内陸山城の京都男が北前船の船頭になるなどということは稀有であろう。事実、日本海航路の船頭や水夫は多く瀬戸内地方や日本海沿岸の出身者であった。京都と秋田に太平洋岸と違う気象上の類似点はあるであろうが、京都美人と秋田美人に相当度の遺伝子関係が直接存在するなどは考え難いことである。

（原稿受理 2003.9.18）